

Title	英語科教員養成の成果と課題
Author(s)	阿久津, 仁史
Citation	聖学院大学論叢,20(2) : 155-165
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=38
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

英語科教員養成の成果と課題

－教育実習後の学生の自己評価と現場教員の評価の分析－

阿久津 仁 史

A Study of the Effects of Training University Students to Teach
English as Trainee Teachers

Hitoshi AKUTSU

The purpose of this study was to examine the effects of training students who would teach English at junior or senior high schools. It was expected that training students would help them practice teaching English more effectively. In the study, 11 university students who had practiced teaching English at junior and senior high schools evaluated their own experience of practicing the teaching of English at junior or senior high schools after their experiences, and the teachers who had helped the students at junior or senior high schools evaluated them. The students' and the teachers' evaluations were used to see the effects of training the students to teach English. The result showed that most of the university students had strong enthusiasm, high motivation, and good flexibility in teaching English, but they were lacking some confidence in English proficiency and knowledge of English usage and grammar. At the same time, the experience of practicing the teaching of English became a good motivator for the university students to study English harder.

Key words: 英語科教員養成 教育実習 自己評価 現場教員の評価

1. 問題と目的

聖学院大学のように英語科教員養成を行っている大学は日本全国に数多く存在し、毎年非常に多くの英語科の教育実習生が、中学校・高等学校の現場で2～4週間は教壇に立って教えている。その数に関する統計的資料は見当たらないが、日本全国で403の大学・短期大学に英語専攻の学科があり、244の大学・短期大学に英文学専攻の学科があることを鑑みると、毎年、少なくとも1000人

以上の大学生が英語科の教育実習を行っていると推測される。

毎年それほどまでに多くの学生が英語科の教育実習をしているにもかかわらず、英語科教員養成に関する研究はさほど多くない。それには、英語教師論に関連する研究領域は触れてはいけないもの（金谷，1995）とされてきた面が影響しているのかもしれない。

少ないながらも概観すると、教員養成に関連する研究の中には、大学での教員養成に関する実践的研究（大里，1980；三木，2005），教育実習生の教授行動の分析（恩藤，1982；恩藤・藤森，1983；Egawa，1989,1999），教育実習日誌の分析（深沢・野澤，1995；猪井，2003），教育実習についての全般的な論考（遠藤・成田・鈴木・仁平，1980；三浦・松浦・赤松他，1998,1999,2000,2001），教育実習に関する質問紙調査（小林，1998；北山，1999；城山，1997；高木，1997），教育実習生の学習指導案の分析（森泉・浅野，2007），英語科の教職課程の現状と課題の分析（山崎，2006）等が散見できる。

しかし、それらの中で、教育実習生が中学校・高等学校の現場の教員の要求にどの程度応えられたかを検証しているものは、高木（1997）が、英語科教育実習生に対する現場教員からの見解と現場教員に対する英語科教育実習生からの見解を、アンケート形式で集めて分析したもの以外には見当たらない。しかも、高木は、自分が直接受け持った教育実習生に対する調査ではなく、今までに受け持ったことのある教育実習生がどうであったか、ということに対する調査を分析しているにすぎず、現場教員と英語科教育実習生の相互の評価を分析したわけではない。

一方、広野他（2004）によれば、教育実習生を受け入れる中学・高校の教員が重視していることとして、以下の3点が明らかになっている。

- (1) 実習生としてふさわしい資質は、「教職への熱意と意欲」と「生徒を理解しようとする姿勢」である。
- (2) 実習生に準備させている内容は、「指導略案」と「教具・教材」である。
- (3) 実習生に求められている英語力は、「適切な発音」・「ALTとのコミュニケーション」・「英語での授業」である。

これは、実習校側からの要望として、「教育に対する熱意」・「研修意欲」・「生徒理解の努力」の3点が求められているという小林（1998）の知見ともほぼ一致している。

聖学院大学においても、毎年10名程度の学生が、中学校・高等学校において教育実習を行っているが、現場の中学・高校の教員からの評価は様々であり、過去の評価を全体的にまとめたものは見当たらない。2007年度は、同学の11名の学生が、中学校や高等学校に教育実習に行ったが、彼ら・彼女らは、上記のような中学校・高校の現場の教員の要求に的確に応えることができたのであろうか。それを検証することは、同学における英語科教員養成のシステムを考える上でも、意義深いものであると考えられる。なぜならば、過去に同学の教育実習生が中学・高校の現場に迷惑をかけてしまった例があったが、果たしてそれは特殊な事例であるのか、それともある程度一般化できる事

例であるのかの検証にもなるからである。

以上の点を踏まえ、本研究の目的は、聖学院大学の英語科の教育実習生達が、中学・高校の現場教員の要求に的確に応えることができたか、あるいはできなかったのか、もし応えられたのであればその要因は何であったのかを探り、これからの英語科教員養成の方法を再考する一助とすることとする。

2. 方 法

対象学生は、聖学院大学人文学部欧米文化学科英語科教職課程の4年生11名（男子6名、女子5名）であった。筆者は、彼らを対象に英語科教育実習の事前指導を目的とした「教育実習」の授業を担当した。

本研究では、以下の3つの筆記データを対象として分析した。分析の視点は、上記に述べた広野他（2004）の教育実習生を受け入れる中学・高校の教員が重視している資質・能力であった。

2.1 教育実習日誌に書かれた指導教諭からの総評

まず、各学生が行った2～3週間の教育実習中に書いた教育実習日誌に記された指導教諭からの総評を分析した。それにより、教育実習生達が、現場教員の要求にどの程度応えられたか、もしくはは応えられなかったかを探った。

2.2 「教育実習」の授業に関するレポート

「教育実習」の授業終了後に書かせた、授業全体に関するレポートを分析した。それにより、授業で学んで実際の教育実習に役立ったことや大学の授業でもっと学びたかったこと等を探った。

筆者の毎回の授業は、以下の手順で行われた。

- (1) 学生による模擬授業とそれに関するディスカッション
- (2) 筆者からの模範授業や筆者の授業のビデオ視聴
- (3) 質疑応答
- (4) 次回の授業の前までに感想や質問等を書いたレポートを提出
- (5) これらに加えて、筆者が勤務している東京都の区立中学校を訪れて、中学2年生と3年生の授業を見学する実習も行った。

2.3 教育実習終了後にまとめた文集

教育実習で学んだことやこれから教育実習に行く後輩達へのアドバイス、という形でまとめた文集を分析した。それにより、教育実習で自分達が現場教員や中学生・高校生達に役立ったと思われる

る点や欠けていたと思われる資質・能力を分析した。

3. 結 果

3.1 実習日誌の中の現場教員からの代表的なコメント

3.1.1 「教職への熱意と意欲」と「生徒を理解しようとする姿勢」に関して

- (1) 前日の反省を元に翌日までに指導案を手直ししてくる点に誠意と熱意が感じられた。
- (2) 生徒とのコミュニケーションを大切にしていこうということを中心に学習してもらいたいと思っていたが、終始誠実に、また積極的に仕事に関わってくれ、短くはあったが、実のある実習とすることができたのではないかと感じた。
- (3) 3週間という短い期間の中で、よく生徒理解に努めていた。だからこそ、生徒も自分を理解してくれたことに応えて授業に取り組んでくれたと感じた。
- (4) 子ども相手の授業というのは、予想もしていないことが起こりがちで、きっと色々と戸惑いもあったことと思う。しかし、その度に自分の課題として受け止め、それを改善しようと努力していたと思う。
- (5) この3週間、私以外にも多くの教員の授業を見学し、また自分自身も授業を行っていく中で、多くのことを学ぶことができたのではないと思う。

以上のコメントから、学生達は高い熱意と意欲を持って教育実習を行い、生徒を理解しようとする姿勢も見られたと現場教員から評価されたことが分かる。

3.1.2 「指導略案」と「教具・教材」に関して

- (1) 研究熱心で、指導書の解説を読み込んだり、大学で学んだ方法を生かそうとしていた。早い段階から研究授業の指導案に取り組み、現在完了の文の導入の仕方について何通りもの方法を考えた。
- (2) 教科指導面においては、教材の準備に大変優れていた。実習中の単元のプリントを予め作って初日に持参したり、授業で文法事項を導入するためのキーワードを模造紙で作成したもの、基本的な文を並べ換えて作るための単語カード、扱われている題材のオーストラリアの Down-Under Map の実物等々、十分な準備を整えて授業を行うことができた。
- (3) 教育実習に来る前から教科書を購入し、教材研究をしていた様子が見られた。
- (4) 生徒の興味を引く導入の仕方、集中させる方法、フラッシュカードの扱い方など、回数を重ねる度に授業の内容も改善され、より良いものにしていけたのは素晴らしかったと思う。

以上のコメントから、大変意欲的に指導案や教材・教具を準備してより良い授業を行おうとした学生達の姿が浮かび上がる。

3.1.3 「適切な発音」・「ALT とのコミュニケーション」・「英語での授業」に関して

- (1) 英語力は相手が中学生であっても専門的知識と日常会話力が相当備わっていないと指導ができないので、blush up に努めて欲しい。
- (2) 本人は自身の英語力について、不十分であると反省しているようだが、年を経て経験を積む事にそれも自ずと力が付いていくことと思われる。会話を始めとする言語活動もこれから色々な形態や方法を学んでいって欲しい。

この点に関する現場教員からのコメントは僅か2例に過ぎなかったが、学生達の発音の力や会話を中心とした英語力に不十分な面が見られたことが推測される。

3.2 授業終了後のレポートの代表的な記述

3.2.1 「教職への熱意と意欲」と「生徒を理解しようとする姿勢」に関して

- (1) 最後の日に手紙を一人ずつに書く時に、あの時はこんな話をしたとか生徒との思い出がどんどん出てきて、書くことに困った生徒はいなかった。日ごろの会話は自分を分かってもらえ、相手を理解できる手段として大きな役目を果たすと感じた。
- (2) 緊張しているなら「緊張しています」と言い、仲良くなりたいたら「みんなと仲良くなりたいたい」と言い、たくさん話せるようになって嬉しかったら「嬉しい」と、自分の思っていることをそのまま口で伝えるようにしていたら、生徒の態度も自然とフレンドリーになった。
- (3) 一日に一回以上はクラス全員と何かしら会話をするという目標を立てながら生活できたのは良かった。コミュニケーションが一番大切だと思うためである。
- (4) 名前をもっと正確に確認しておくべきだったと思う。読み方が難しい子がたくさんいるためである。

3.2.2 「指導略案」と「教具・教材」に関して

- (1) 小道具をたくさん使い、英語だからできる授業展開が出来たのではないかと思う。
- (2) 指導案を実習前に作っておけば良かったと思う。
- (3) 毎回指導案に時間をとられてしまい、教材研究が自分の納得のいくようにできなかった。実習期間の全体的流れがわかっているならば、土日のうちにその週に行く予定の授業の指導案は全部作っておくべきだと改めて感じた。
- (4) 実際に授業で使えるか分からなくても、アクティビティをもっとたくさん準備しておけば良かったと思う。
- (5) もっと文型 (S, V, O, C, M) を勉強しておけば良かったと思った。
- (6) 唯一、指導教諭から褒められた事があった。受動態の文法を教えた時である。『～される、～された』ものが主語になる、be 動詞の形を変える事によって時制を変える事が出来ると説明した後に、例文を出して教えてあげたら、生徒達は、『なるほど!!』と言って納得してく

れた。

- (7) テーマを重視したマイクロティーチングなど、回を重ねて行っておくべきであった。
- (8) 文法についての質問時間や確認時間があればいいと思った。みんなで確認すれば自分が教える範囲ではなくても再確認にもなると思うためだ。

3.2.3 「適切な発音」と「ALT とのコミュニケーション」と「英語での授業」に関して

- (1) 英文（本文・単語等）の読みの練習は事前しておくべきだと思った。
- (2) 基本文の確認と単語の発音等。これが出来ていれば問題なかったと思う。
- (3) 発音の矯正を徹底的にやっておくべきだったと思った。発音に自信がなかったので、音読練習はCDを使っていた。
- (4) 基礎学力をつけておけば良かった。単語を間違ったり、質問に答えられなかったりした。あと感じたのが、ALT との対話。自分の言いたいことが言えなかったりしたので、会話力があればいいと思った。
- (5) クラスルームイングリッシュをもっとすらすら言えるようにしておけば英語の授業らしくなったと思った。
- (6) レッスンプランを考えたときに、辞書などを使ってALT に説明するための台本を作っておけば良かったと思った。

3.3 文集の代表的な記述

3.3.1 「教職への熱意と意欲」と「生徒を理解しようとする姿勢」に関して

- (1) 担当クラスの生徒の顔と名前をほぼ完璧に覚えてから実習に入って良かった。
- (2) 毎朝、朝の会で1つの国旗を紹介し、その国の言葉で朝の挨拶をした。思ったより生徒の反応が良くて、コミュニケーションをとる1つの方法にもなった。
- (3) 生徒にやってあげたことが、最後にもらった色紙や手紙に全部書いてあった。自分がしたことはその分、しっかり返してくれると思った。
- (4) できるだけ話しかけてこないような少し消極的欲的な子の所に積極的に話をしに行った。
- (5) 最初のイメージが最終日には全く変わり、クラス全員一人ひとりを心から本当に可愛いと思え、怖かった部分や不安だった部分など全て消え去っていた。
- (6) 毎日が忙しくて、寝る暇もなく、先生には厳しい指導を受け、でも、とても楽しかった。教えることや生徒とのふれあいが体験でき、実際の現場に触れることができて良かった。

3.3.2 「指導略案」と「教具・教材」に関して

- (1) 教科指導法でやったこと全てが役に立った。フラッシュカード・クラスを意識した説明の仕方・模擬授業、など現場でそのまま活かされた。
- (2) もっともっと教科指導法を真剣にやっていたら良かった。数をこなすことも必要だが、その

時、その時をしっかりとやるのが成果として表れると思う。

3.3.3 「適切な発音」と「ALT とのコミュニケーション」と「英語での授業」に関して

- (1) 自分の英語に対する取り組みの英語力の低さが露呈してしまった3週間だったので、もっともっと英語の勉強をしておくべきだった。
- (2) 私も英会話が全くできないので、プランを考えた時点でALTに説明するための台本を作っておけば良かった。
- (3) 英語の知識・技術が足らず、非常にもどかしい授業をした3週間だったので、それだけが心残りであった。

4. 考 察

中学校・高等学校の現場教員から教育実習生への要求を分析すると、

- (1) 学生が短期間で身につけられる資質・能力
- (2) 身につけるにはある程度の時間を要すると思われる資質・能力
- (3) 生まれつきの性格や長い期間を経た経験等が大きく左右し、身につけるにはかなり長い期間を要すると思われる資質・能力

の3つに分けられると考えられる。その観点から考えた場合、中学・高校の教員からの3つの要求はどうであろうか。

まず、(1)「教職への熱意と意欲」と「生徒を理解しようとする姿勢」であるが、前者は、学生が大学在学中に身につける面も多少はあるかもしれないが、むしろ、上記の(3)生まれつきの性格や後天的な経験等が大きく左右していると考えられよう。

その一方で、後者は在学中の様々な授業や経験によって備わってくる面も大きいと考えられる。聖学院大学は、キリスト教精神の具現化という建学の精神の元、学生達は、様々な授業や実習、クラブ活動やサークル活動等を通して、特に、「生徒を理解しようとする姿勢」を育みながら学生生活を送ってきたのではないと思われる。例えば、ある学生のレポートに見られた「介護体験で養護施設に行ったときに感じたことが、子どもに正しい答えを求めないということであった。障害のある子どもたちの中には、大人が言ったことをその通りにしてくれたり、中には全く別なことをして困らせたりしていた。しかし先生方は何も怒るようなことはしなかった。それは正しい答えを求めているからだと思った。」という感想などは、障害のある生徒をありのままに受け入れることの大切さを学んだ証拠と言えるだろう。そのような体験があったからこそ、上記のような姿勢が育まれたのではないかと思えるが、それだけに留まらず、同学の教育活動全体が、学生達にその資質・能力を身につけるために役に立ったと考えるのが自然であろう。しかし、学生達にとっては、同学の教育活動のどの部分が自分達の「生徒を理解しようとする姿勢」に役に立ったのかを判断するこ

とは大変困難である。意識的に生徒を理解しようとするのではまだ不十分で、むしろ、無意識のうちに学生達が身につけた資質・能力であるからこそ、中学生・高校生に対する接し方に自然と反映されたのではないかと思われる。

次に、(2)の「指導略案」と「教具・教材」であるが、前者は、大学の英語科教育法等の授業を通して、比較的短期間でその作り方を身につけられると考えられる。

一方後者は、英語を教えるための教具・教材は非常に多岐にわたっており、中学・高校の現場の教員ですら苦労していることから分かるように、短期間で作り方を身につけることは大変難しく、非常に長い期間や経験が必要とされるのは自明の理である。とはいえ、基本的な授業の流れから必然的に必要とされる教材研究や指導過程に関しては、同じく、大学の英語科教育法等の授業を通して、比較的短期間でその知識を得たり方法を身につけたりすることが可能であろう。前述した「教科指導法でやったこと全てが役に立った。フラッシュカード・クラスを意識した説明の仕方・模擬授業、などなど、現場でそのまま活かされた。」という学生の感想にもそれがよく表れていると思われる。

最後に、(3)の「適切な発音」・「ALT とのコミュニケーション」・「英語での授業」であるが、いずれも、短期間で身につけることができるような資質・能力では決してあるまい。学生の感想にも最も多かったのが、自らの英語力の不十分さに関する自戒の念でもあったが、その点に関して詳しく考察してみる。

現在の大学生は、平成元年の学習指導要領のもとで作られた教科書を使用して英語教育を受けてきた。平成元年の中学校の学習指導要領では、「外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う。」(文部省, 1988, p. 6) という外国語の目標が掲げられた。学習指導要領に、初めて「コミュニケーション」という言葉が入ったことから分かるように、現在の大学生は、コミュニケーション重視の英語教育を受けてきたと言えるだろう。しかし、コミュニケーション重視と言えば聞こえは良いかもしれないが、当時は、ペアワーク等のゲームや歌等を行っていればコミュニケーション重視の英語教育をしていることになる、というような誤解もあり、文法や語彙等の知識が不十分であったとしても、コミュニケーションできれば良い、という風潮も見られ、Thompson (1996) や Karavas-Doukas (1996) 等の批判も受けた。ある意味では、相手の言うことや文章が何となく理解できて、こちらの言うことや書くことも、たとえ間違いがあっても、何となく通じれば良い、とする英語教育を現在の大学生は受けてきたと言えるかもしれない。

しかし、海外旅行の買い物等で英語を使えば良い、という程度を目標とする英語の学習者としてはそれでも良いかもしれないが、中学生や高校生を教える英語科教員としては、それではあまりにも不十分であることは明らかである。そのため、大学の英語科教員養成課程においては、学生達が学んできた、上記のような中学・高校の英語教育の不十分な点を補うことも必要となるであろう。

山崎（2006）によれば、各大学の英語科教職課程において学生の選択必修の科目を多い順にあげると、「英語学」、「英語圏の文学・文化」、「英語音声学」、「英語運用能力養成科目」、「異文化コミュニケーション」であり、その他に、「英語教育学概論」、「英語史」、「英語圏の地域研究」なども含まれるという。聖学院大学においては、学生達が履修することができる科目が、「英米文学概論」、「英語音声学」、「英語意味論」、「教えるための英文法」等々、非常に多岐に渡っており、他大学の英語科教職課程の学生が履修できる数に勝るとも劣らない。

しかし、教育実習を行った学生達の英語力は、最も高いと思われる学生で実用英語技能検定2級取得レベルであったことを考えると、上記のような専門的な授業に加えて、もう少し基礎的な英語力を身につけさせる授業も必要となるかもしれない。無論、前述したような、「モデルとなる英語の発音ができるようになる」「ALTとのコミュニケーションがとれる」「英語で授業ができる」、の3つの能力は、一朝一夕に身につけられるものではない。英語科教育法の授業では、約1ヶ月間、個々の学生の発音を教員が個別に矯正しているが、それだけではなかなか難しいだろう。だが、例えば、コンピューターを用いた授業で個々の学生の発音の矯正に効果があった飯野・阿久津・鈴木（2007）のような研究もあり、今後の検討に値するのではないと思われる。

また、特に「英語で授業ができる」という部分に関しては、英語科教育法等で模擬授業をさせる際に、オールイングリッシュでできるように台本を作らせたが、さらに様々な場面で用いるクラスルームイングリッシュを徹底して覚える、ということまで学生達に要求することも必要となるであろう。というのは、それによって、英語力に自信のない学生も、安心して英語で授業ができるようになると思われるためである。これは、中学校や高校の新規採用英語教員もよく行うことであり、今後の授業に取り入れていくべき内容であろう。

以上の点から、先に述べた、過去に中学・高校の現場に迷惑をかけてしまった同様の学生がいたという事例は非常に稀な事例であり、同様の英語科教員養成課程は、概ね成果をあげていることが分かる。特に、中学・高校の現場の要求はかなり満たしていることは明らかであるが、学生達自身は、自分の英語力に対する不安が強いようであり、やはり、しっかりと英語力の土台の上に教員免許を載せるようにすることが必要となるであろう。

5. 本研究の限界と今後の課題

本論においては、守秘義務等の問題もあり、実習校からの実習生に対する評価を全て数値化して分析する方法を取らなかったため、本学の英語科教員養成が中学校・高等学校現場の要求に的確に答えたかをどうかを数量的に検証することはできなかった。教育実習生自身のレポートや実習日誌での中学・高校の教員からのコメント等を通じて、いわば、質的に検証したに過ぎない。実習校の評価を絶対視することは慎むべきではあるが、プライバシーの問題等を何らかの形で解決して、実

習校からの実習生への評価を数量的に分析していく方法も、今後は模索していく必要があるだろう。

教育実習は、学生達に対して、教育者として生徒達の役に立つ喜びと、きちんと教えなければならぬということに対する責任を大いに感じる好機である。特に、自分の英語力の低さを痛感するとても良い機会となったと思われる。だが、逆説的ではあるが、より真剣に英語を勉強する良い動機付けにもなるということである。教員養成系の大学で3年次と4年次の2回教育実習が行われることは、英語学習に関する動機付けも起因しているのかも知れない。同学では2回教育実習を行うことは難しいであろうが、学生の中には、インターンシップで小学校や中学校で教えている者もあり、それも英語学習の良い動機付けとなっていることであろう。そのような経験を一層広げていくことも今後は一層重要となるであろうと思われる。

巷で取りざたされていた2007年問題からも分かるように、空前の数の退職者を前に、各都道府県教育委員会は、少しでも質の高い教員を確保しようと躍起になっている面がある。

神保・伊東(2004)によれば、英語科教員を採用する教育委員会が重視している点として、以下の点が明らかになっている。

- ・英語科教員としてふさわしい人物は、「問題に対応する柔軟性」である。
- ・教職として必要な資質・能力は、「教育に対する情熱と熱意」である。
- ・授業場面での必要は資質・能力は、「分かりやすい授業の展開」である。
- ・英語科教員として必要な能力は、「英語教授の知識」・「英語の語学的知識」・「国際理解教育の知識と教養」・「異文化コミュニケーションへの知識」である。
- ・英語科教員として必要な英語力は、「英語での授業」である。

本論で明らかになったように、聖学院大学の学生は、上記の「英語科教員として必要な・能力」以外は、ほとんど全て、採用する教育委員会の要求をも満たしているように思われる。中学校・高等学校の現場には、英語力だけは高くても、それ以外は同学の学生の足元にも及ばないのではないかと思われるような英語教員がいる現状もある。それゆえに、本論が、本学の学生達が今後充実した教育実習を行い、それを生かして中学・高校の教員になるための一助となれば、筆者としては望外の喜びとなるであろう。

引用文献

- Karavas-Doukas, Evdokia 1996 "Using attitude scales to investigate teachers' attitudes to the communicative approach" in *ELT Journal* Volume 50/3 Oxford University Press 187-198.
- Thompson, Geoff 1996 "Some misconceptions about communicative language teaching" in *ELT Journal* Volume 50/1 Oxford University Press 9-15.
- EGAWA, Michiko. (1989). "The Application of Flanders Interaction Analysis in the Teacher Training Course" 『女子聖学院短期大学英文学会誌』 21, 25- 37.
- EGAWA, Michiko. (1999). "A Comparison of Classroom Interaction between Experienced Teachers and

英語科教員養成の成果と課題

- Student Teachers by Utilizing Flanders Interaction Analysis.(FIA)”『女子聖学院短期大学英文学会』31, 57-76.
- 飯野厚・阿久津仁史・鈴木政浩. (2007). 「音読ソフトを利用した音読能力のスコア化：習熟度との関係および繰り返し音読によるスコア変化の検証」『関東甲信越英語教育学会紀要』21, 37-48.
- 猪井新一. (2003). 「英語か教育実習日誌の分析」『東北英語教育学会研究紀要』23, 45-54.
- 遠藤登・成田実・鈴木一司・仁平有孝. (1980). 「英語科における教育実習の現状と問題点」『茨城大学教育学部教育研究所紀要』12, 93-100.
- 大里文人. (1980). 「英語科教育実習生の英語能力と指導技術の改善(1)」『佐賀大学教育学部研究論文集』28, 39-45.
- 恩藤周典. (1982). 「英語科教育実習生の教授行動の分析(1)」『岡山大学教育学部研究集録』59, 243-251.
- 恩藤周典・藤森和子. (1983). 「英語科教育実習生の教授行動の分析(2)」『岡山大学教育学部研究集録』63, 117-123.
- 金谷憲 (編著) (1995). 『英語教師論』(英語教育リサーチ・デザインシリーズ2) 河源社
- 北山長貴. (1999). 「英語科教育法と教育実習に関わる問題－教育実習を通じて学生は何を考え何を学んだのか」『比較文化』4, 241-261.
- 小林多佳子. (1998). 「英語科教育法の授業改善の視点－教育実習記録と意識調査をもとに」『學苑』697, 21-29.
- 城山藤一. (1997). 「英語科における教育実習の現状と問題」『ノートルダム清心女子大学紀要』21, 137-149.
- 神保尚武・伊東弥香. (2004). 「全国公立中・高の英語教員募集内容と採用の観点に関する調査」JACET 3月例会口頭発表.
- 高木信之. (1997). 「英語科教育実習の実態調査に見る英語科教員の方向性の一考察」『熊本大学教育学部紀要 人文科学』46, 231-243.
- 広野威志・山崎朝子・茂岡千利世・酒井志延・久村研. (2004). 「教育実習の受け入れ側の意識に関する調査」JACET 第1回関東甲信地区大会口頭発表
- 深沢清治・野澤久美. (1995). 「英語科教育実習における Diary Studies の試み」『広島大学学校教育部紀要 第1部』17, 47-53.
- 三浦省五・松浦伸和・赤松猛・伊賀泰恵・石原義文・大隈教臣・岡野賢吾・笹原豊造・壇泉・原田良三・三宅重徳. (1998). 「これからの英語科教員養成の課題(1)」『広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制研究紀要』26, 55-62.
- 三浦省五・松浦伸和・赤松猛・伊賀泰恵・石原義文・大隈教臣・五井千穂・笹原豊造・壇泉・原田良三・三宅重徳. (1999). 「これからの英語科教員養成の課題(2)」『広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制研究紀要』27, 53-60.
- 三浦省五・松浦伸和・赤松猛・伊賀泰恵・石原義文・大隈教臣・五井千穂・笹原豊造・壇泉・原田良三・三宅重徳. (2000). 「これからの英語科教員養成の課題(3)」『広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制研究紀要』28, 81-89.
- 三浦省五・松浦伸和・赤松猛・伊賀泰恵・石原義文・井長洋・大隈教臣・五井千穂・笹原豊造・壇泉・原田良三. (2001). 「これからの英語科教員養成の課題(4)」『広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制研究紀要』29, 141-148.
- 三木徹. (2005). 「指導案作成と模擬授業を通じた英語科教員養成プログラム」『大谷女子大学英語英文研究』32, 43-67
- 森泉哲・浅野享三. (2007). 「中学校英語科授業の実態と課題」『南山短期大学紀要』34, 59-74.
- 文部省. (1988). 『中学校指導書外国語編』開隆堂出版
- 山崎朝子. (2006). 「英語科教職課程の現状と課題」『武蔵工業大学環境情報学部紀要』7, 103-112.